

氏名	前島 光		
学位の種類	博士（ヒューマン・ケア科学）		
学位記番号	博甲第 9118 号		
学位授与年月	平成 31年 3月 25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	教師のストレスが児童生徒のストレス・学校満足度に及ぼす影響 -教師のエンパワーメントに着目して-		
主査	筑波大学教授	医学博士	水上 勝義
副査	筑波大学教授	博士（心理学）	庄司 一子
副査	筑波大学教授	教育学修士	杉江 征
副査	筑波大学准教授	博士（医学）	笹原 信一郎

論文の内容の要旨

前島光氏の博士学位論文は、教師のストレスと児童生徒のストレスや学校満足度が関連することを検討し、さらに教師のエンパワーメントやサポートを改善するプログラムを実施し、教師と生徒に対する効果を検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

（目的）

著者はまず先行研究を概観し、精神疾患による休職教員の数が10年間でおよそ倍になったとの報告、所属校への勤務後2年以内に休職することが多いとの報告、悩みを上司や同僚に相談できると回答した割合が一般企業労働者64.2%に対して教師はわずか14.1%であったとの報告、エンパワーメントが教師同士のサポートに重要などの報告を取り上げ、教師のストレスにエンパワーメントやサポートが関連し、エンパワーメントやサポートを高める取り組みが必要なことを指摘している。

次に著者は、不登校の児童生徒は教師とのふれあいで再登校が可能になるなど、児童生徒は教師の影響を強く受けることに言及し、児童生徒のメンタルヘルスや学校満足度も教師のメンタルヘルスの影響を受けることが推察されるが、この点についてこれまで検討されていないことを指摘している。

以上の経緯から、研究1では、教師のエンパワーメントやサポートがストレス、ストレス反応を軽減するか、研究2では、小中学校の教師のストレスが、児童生徒のストレスや学校満足度に関連するか、そして研究3では、教師のエンパワーメントやサポートを高める取り組みが、教師や生徒のストレスや学校満足度に影響するかを検討することを目的としている。

（対象と方法）

研究1の対象は、A県B市の小学校16校、中学校8校の各学校に所属する小学校教師341名（男性122名女性219名）、中学校教師230名（男性142名女性88名）である。職業性ストレス簡易調査票、教師の職業性ストレス尺度、教師のエンパワーメント尺度などからなるアンケート調

査の結果を、小学校と中学校それぞれについて、男女と勤続年数（3年未満、3年から10年、10年以上）別に分析している。研究2では、研究1と同じ小学校と中学校のうち小学5年生1264名、中学2年生1279名と、それぞれの学校に所属する教師571名を対象とし、アンケート調査を実施している。教師には研究1と同じ尺度を用い、児童生徒に対しては、ストレスと学校満足度についてアンケート調査を実施している。研究3では、研究1、2の調査対象中学校のうち、中学生の学校満足度が低く学校規模がほぼ同じ2校を対象とし、そのうち1校を介入校、もう1校を非介入校としている。介入校で実施したプログラムは、学校内で教師全員が課題とその解決方法を共有し、5年目の教師と1年目の教師がペアになり教科を超えて日常的に指導支援をし、教科会を定期的に行い、互いの授業実践を評価し合う、などを柱としており、3ヶ月間実施している。プログラム前後に2校に所属する教師と中学校2年生を調査対象に、2回のアンケート調査を実施し、プログラムの効果を検証している。

（結果と考察）

研究1から著者は、小中学校共に女性教師は男性教師と比較してエンパワーメントがより低いこと、中学校の女性教師は男性教師に比べてストレス要因の評価懸念が有意に高く、周囲のサポートや満足感が低く、より大きなストレスを抱えていることを明らかにしている。勤続年数別の分析から、小学校、中学校ともに3年未満の教師は、10年以上の教師より、エンパワーメントがサポートに強く関連すること、3年未満の教師の評価懸念とエンパワーメントは、強い負の相関関係を示すことなどを明らかにしている。この結果から、著者は、勤続3年未満の教師や女性教師のエンパワーメントを高めることが重要なことを指摘している。

研究2から、小中学校共に教師のストレスが大きいほど児童生徒の心理的ストレスが低下することを報告している。また学校満足度に関しては、小学校教師のストレス反応と児童の学校満足度は正の相関がみられ、中学校では、教師のストレス反応と中学生の学校満足度は負の相関がみられることを示している。著者は、小学校は学級担任制で対応の多さが児童の満足度を高めた一因とし、中学生は多感な時期であることから、教師のストレス反応が生徒にマイナスに反映した可能性を考察している。

研究3から介入校において、介入プログラム実施後、女性教師の同僚性サポートが高まり、勤続年数別では3年未満の教師の組織ストレスとストレス反応が低下したこと、中学生の学校満足度が有意に高まったことを報告し、今回のプログラムの有用性を述べている。

（結論）

以上より著者は、小学校、中学校教師ともにストレスの軽減にエンパワーメントやサポートが重要なこと、小学校、中学校ともに教師のストレスは児童生徒のストレスや学校満足度に関連すること、本研究で実施した学校全体の組織的な取り組みは、女性教師や3年未満の教師のストレスやストレス反応を低下し、中学生の学校満足度に対する効果も認められ、有用であることを結論としている。

審査の結果の要旨

（批評）

これまで教師と児童生徒のストレスの問題は、別々に取り上げられることが多かったが、本研究の分析から、教師の職業性ストレスと児童生徒のストレスや学校満足度が関連することを明らかになった。また今回実施したプログラムは、教師のストレスとともに中学生の学校満足度に効果を認めたことから、今後このプログラムが学校現場で活用されることが期待される。よって本研究は学術的意義とともに学校現場への多大な貢献が期待される研究と評価できる。

平成31年1月22日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。よって、著者は博士（ヒューマン・ケア科学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。